

ウィーン禅センターにおける禅の受容と実践

高井 文明

本論文は、オーストリアの首都ウィーンに存在する2つの禅堂および禅センター「菩提達磨禅堂」と「禅センター微笑庵」において禅がどのように受容され、実践され、そして解釈されているか。また、なぜそこに人々が集まり、主にオーストリアで生まれ育った参加者たちが積極的に禅を自らの生活に取り入れようとするのかを明らかにしようとするものである。

資本主義社会、情報化社会、個人化、グローバル化が進み、宗教も時代やその社会、文化の影響を受け、その形や人々の解釈は変わりゆく。今後、世界中の仏教およびその諸現象が研究対象として挙げられていくだろう。その一例としてウィーンにおいて、実際に禅を実践する人々の動的な姿と共に、その諸現象を描くことが本研究の意義である。

第一章では、先行研究を概観し、オーストリアの宗教人口や、禅仏教史などの基本的な情報をまとめた。オーストリアにおける禅の歴史を見ると、アメリカ仏教からの影響が強い。本論では、ケネス・タナカのアメ리카仏教研究⁽¹⁾を参考にオーストリア禅仏教との比較を試みている。

オーストリアの宗教人口は2001年オーストリア総務省の統計⁽²⁾によると、オーストリア総人口およそ800万人のうちローマ・カトリックが73%、次いでプロテスタント5%、イスラム教4%、オーソドックス2%、非キリスト教という項目が4%で、そのうちユダヤ教0.1%、仏教0.1%、最後に無宗教11%というデータが残っている⁽³⁾。ある人口統計学の研究調査⁽⁴⁾によると、2016年ローマ・カトリックは64%まで減少、イスラム教が8%、無宗教が17%まで増加したという。また、今後30年の間にローマ・カトリックは42%まで減少する見込み⁽⁵⁾があるとされている。

続いてオーストリアにおける禅に関する先行研究の問題点をあげると、奈良康明の研究⁽⁶⁾に関しては、本質主義に陥っているという批判ができ、各地の宗教を進化論的に見ないというタンバイアの姿勢を本論文では目指した。松本史郎のオーストリア仏教に関して記したもの⁽⁷⁾は見聞録のような旅行記と変わりなく、具体的な取り組みや、仏教を実践する人々の生の声が伝わらない。また、エノミヤ・ラサールや上田閑照など思想及び哲学的なアプローチをしたものが多く、人類学視点からの研究が不足しているという問題があった。

第二章では、筆者の行ったフィールドワークを描写し、それぞれの対象の概要を示した。菩提達磨禅堂は1979年に設立されたウィーンで最も大きく歴史ある臨済禅グループである。メンバーはおよそ130人で、オーストリア禅の父と呼ばれる玄朗和尚によって設立された。玄朗はアメリカで禅の修行をし、ウィーンへその教えを持ち帰った。当時の禅の支配的なイメージであったキリスト教的禅といったものと真っ向から向き合い、禅に対する神秘的なイメージを払拭することに尽力した。現在はアメリカ人の希玄和尚が玄朗の跡を継ぎ指導者となっている。菩提達磨禅堂は特徴として、玄朗や希玄の人柄、師と

してのスピリチュアル性に惹かれている人が多く、仏教を自らの宗教と語る人が大半を占める。日本の妙心寺派の寺院と交流があり、日本の臨済禪に伝統意識を持っている。

禪センター微笑庵は2006年「大心禪オーストリア」という名前でスタートした。創設者はフロア・サクラ・ヴェスであり、フロアは1998年からドイツで、方広寺にて修行経験のあるドイツ人ヒネアク・ポレンスキー（1959～）のもと禪を学んだ。現在メンバーは33名で、男女比は6対4、平均年齢はおおよそ45歳である。フロアが女性の指導者ということもあり、女性の参加者は割合として多い。定期的な坐禅会に加え、シンポジウムやハイキングなどを企画している。

第三章では、フィールドワークをもとに焦点を三点に絞り、各節で考察を示した。第一節では、禪との出会いとして、オーストリアで人々はどのようにして禪に出会い、なぜ禪に取り組む人が増えているかを考察した。第二節では、禪の受容の中で特に実践が重視されており、禪が仏教から乖離している現象に関して述べた。第三節では、オーストリアでは禪に対してどのような解釈がされているかについて考察を行った。その中で、現代社会に対して禪を通して考えられることを記した。

オーストリアにおいて人々が禪に出会う入り口として、本や雑誌・インターネット・友人からの紹介・ヨガや瞑想、キリスト教的禪、他の仏教グループからの派生・東洋や日本文化への興味・日本の伝統芸術などが大きく分けて挙げられる。禪に興味を持つタイミングということを見ると、健康などの観点からのほかに、大事な人との死別や、鬱などの精神的な危機、異性関係の乱れなどが関係している。それらの苦境に際し、禪を通して自己と向き合い、自らを成長発展させ、困難を乗り越えていく。オーストリアでは2000年代から無宗教者も増え続けており、宗教という科目も義務教育において必修科目から外されるという状況がある。これらを全て踏まえると、禪に出会い、禪を実践し続けるようになるという現象の裏側には、宗教に関わってこなかった人々、関心を持たなかった人々が困難に向き合った際に初めて気づく弱い自己の発見と新たな生き方の模索ということが背景にある。そして禪との出会いは、玄朗や希玄、フロアといったよき指導者との出会いとも言える。師匠という存在は、それぞれの禅体験の中で生き生きと語られるものであった。

禪センターに通う人の多くは宗教へのコミットメントという観点では差が生まれるものの、元ローマ・カトリック教徒であった。彼らの描く教会という組織に対するイメージは、良し悪しを別にして、政治や権力、社会生活とつながっている構造そのものである。ローマ・カトリックからの脱会は、教会税を支払わなくて済むということだけではなく、そういった既存の社会構造からの脱却も意味する。オーストリアには禪や仏教という基盤がなかったからこそ、こういった教会の周りに存在するようないがらみが無かったのである。

フィールドワークを通して禪の受容に関して、ふた通りの捉え方があることが明らかになった。一つは仏教の一宗派としての禪の受容であり、もう一つはよりよく生きる為の哲学や生き方として禪を受容し、仏教から禪という実践を切り離すという捉え方である。この現象は、理論よりも身体的実践重視の傾向を物語っている。

オーストリアの経済は1946年どん底からのスタートであったものの、21世紀に入り、物質主義は社会に浸透し、インターネットの普及とともにモノと情報が溢れる社会になった。しかし、その経済発展も20世紀終わりから伸び悩み、経済は行き詰まる。ウィーンは旧市街が残る古い音楽の都であるが、オーストリア人にとっては国内で最も忙しい都市であり、個人主義的な生活を人々は送っている。そういっ

た時代・社会背景も踏まえた上で、教会を脱会する人と禅を実践する人が増加し、教義的な言葉よりも坐禅のような身体経験を重視しているという現象は、これまでロゴス中心主義・セオリーファーストで生きてきた人々の現実世界での行き詰まりであり、自らの実践によってそれを打開しようとする流れという見方ができる。

第四章では、本論の結論を示した。玄朗は生きた禅の土壌がないオーストリアで、禅に対する密教的で神秘的なものという偏見からの脱却に尽力した。玄朗はオーストリア禅仏教の地盤を作り上げ、実践の場としての菩提達磨禅堂を作り上げた。80年代禅グループは菩提達磨禅堂のみで、それに対する認知度も低かったが、禅を取り巻く環境は変化し、禅や仏教グループは街中に見られるようになった。定期的に開かれる坐禅会は菩提達磨禅堂だけでなく、微笑庵といった他の場所でも行われるようになり、禅の受け皿は広がっている。実際に禅を実践する人々の多くが洗礼を受け、かつては両親と教会を訪れていた経験を持つ。教会は家族や地域、社会との繋がりを持っており、その教会は社会の構造との繋がりでもあった。これまでうまくいっていたロゴス中心主義や白か黒かという二項対立的な考え方は、それがカバーすることができないグレーな事象が現れた際にどうしても行き詰まる。その行き詰まりを解消すべく、人々は構造を脱却した。構造的なしがらみがなく自由な禅は、脱却した人々が悩んだ末にたどり着いた新たな道であり、よりよく生きるための術であった。

ただ坐り、内省する。実践を重視し、身体的経験を通して自らの成長を促し、苦難を乗り越えていく。人々が教義よりも実践に注目し、実践の道を選択することは禅の精神に対する賛同であり、現代人の生き方への探求の姿勢が見て取れる。その背中を押す師匠やグループのメンバーは、祈りや冠婚葬祭ではなく、実践が作る新たな紐帯であり、人々は集まっていく。このような脱構築と再構築の流れを汲み取れることもできよう。

注

- (1) ケネス・タナカ 2011 『アメリカ仏教』 武蔵野大学出版
- (2) http://www.statistik.at/web_de/statistiken/menschen_und_gesellschaft/bevoelkerung/volkszaehlungen_registerzaehlungen_abgestimmte_erwerbsstatistik/bevoelkerung_nach_demographischen_merkmalen/022894.html (2007/12/11)
- (3) http://medienservicestelle.at/migration_bewegt/2013/01/18/weltreligionen-in-osterreich-daten-und-zahlen/ (2013/1/18)
- (4) <http://derstandard.at/2000062938563/Religionsstatistik-Wer-in-Oesterreich-woran-glaubt-wird-nur-geschätzt> (2017/8/22)
- (5) http://diepresse.com/home/panorama/religion/5264108/Religion-in-Oesterreich_Mehr-Konfessionslose-mehr-Muslime (2017/8/4)
- (6) 奈良康明 1974 「禅の伝承と変容」 駒澤大学佛教学部論集 5, 102-121
- (7) 松本史郎 1987 「世界の仏教」 自由仏教懇話会